思い出の数々

金沢区支部　大澤　春子（妻）
戦没者　大澤　威
戦没地　中国・浙口省

今年も早や六十五年前の思い出の日が巡って参りました。私こと昭和五十八年小田原栢山在住、神奈川県代表一名、日本武道館で天皇皇后両陛下の御前で献花した日、身に余る光栄の日、生涯忘れられない涙の一日、この日が亡き夫の霊がと涙にしたる日々。

終戦日　県一名武道館　陛下身近に涙にしたる

主人の故郷は瀬戸内海に面した四国波止浜。戦局一段と厳しくなり、教育召集兵として出征（徳島部隊）。主人は先に故郷に、私と三歳四ヶ月の息子は二日遅れ故郷にやっとやっとで切符を入手して、故郷で盛大に大勢の方々に送られて、この日が永久の別れの日。

戦局日々厳しく昭和二十年八月終戦の日となり、日々の新聞、ラジオにて操（みさお）部隊復員が知らされ、何年来会えなかった日を唯一の楽しみの日々。春のお彼岸の日、ポストに一通の

©2011_財団法人神奈川県遺族会

手紙入手、今まで文通なき方からの長々の文面、急ぎ封を切り、戦友の奥様からの文面、「主人は昨夜無事帰宅しましたが、大澤様は中支の露となり御遺骨は佐世保に届いている」との文面、家族一同茫然自失、涙も出ませんでした。

各家庭に電話などなきあの時代、涙こらえて岡山在住の主人の兄に長々手紙を記し、すぐ佐世保まで再三出向いて下さり、やっと下積みになっている遺骨を小田原に持参いただき、「ご主人のだから春子さんが開けてください」と申され、遺骨は唯二個、あとは黒く焼かれた石が二、三個の亡き主人の姿、家族一同涙も出ず唯々茫然自失、さびしい日でした。

さて、今後幼き子をかかえ如何に生きねばと涙しつつ考える日々。近くに私の恩師在住。やさしい女の先生で「あなたなら猛勉強して教師の資格をとりなさい」とのお言葉で、幼い子は母が世話して、私も眠らず猛勉強して教師の資格をとり生き抜いて参りました。

今、この不況の時代、つらかったが子供のため生き抜いて参り、教師をしていてよかったと思います。つらかったが毎日脅威の日々。父知らぬ子も、沢山バイトをして大学を出て、三か所の銀行の支店長をした息子にも先立たれた悲しさですが、嫁も父が戦死、心やさしく月に二、三回は私が老いの身体ですので小田原墓参、仏前はいつも沢山の供物、花々ですてきです。庭に様々な花が咲き世話を良くしています。心やさしい嫁ですので‥‥。あの空の上から如何ばかり喜びおる事かと、文才なき老いの身いろいろ記したいが目はかすみ失礼、お許し下さいませ。拙い短歌を記します。老いの私の人生の一端でございます。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

瀬戸の海　子を背負いつつ連絡船　この日が永久(とわ)の別れの日とは

混乱のまっただ中をじっと堪(た)え　教師の日々を誇(ほこり)と思う

生命(いのち)とは　いつか終わりがあるなれど　戦争(いくさ)のために彼(か)も吾(わ)も無念

©2011_財団法人神奈川県遺族会